

日本における図書館史研究の現状と課題 (終)

石井 敦 (東洋大学)

河井弘志 (立教大学)

川崎良孝 (椙山女学園大学)

藤野幸雄 (図書館情報大学)

第三節 アメリカ図書館史研究

日本におけるアメリカ図書館史研究は、公共図書館史を中心に、活発化してきた。こうした状況を導いた要因を3点にしぼり挙げておきたい。

まず、Michael Harrisの revisionist interpretation は、日本にも影響を与え、従来とは異なり、Jesse H. Sheraや Sidney Ditzion の業績を批判的に検討するという方向が現れてきた。これに関連して、研究史を系統的にまとめ、今後の研究の基礎を打ち立てようとする動きもでてきている。

次に、日本の現在の図書館界では、行政改革、経済不況、オンライン文献情報サービスとのかかわりで、有料制論議が生じつつある。この現実的関心は、公共図書館の無料原則を起源にさかのぼって考察する姿勢を導いた。かくて、従来にもまして、ボストン市立図書館設立の思想に関心が高まってきた。この動向には Harris の revisionist interpretation も影響をおよぼしている。

最後に、日本の公共図書館の現代的課題として、図書館利用において不利益をこうむっている人へのサービスがある。こうした課題とのかかわりで、Library Services Act(LSA) や Library Services and Construction Act(LSCA) の意図と実践が紹介されたり、評価されはじめた。同時に、1960年代のアメリカ公共図書館の思想と実践にも興味もたれている。

ここでは、図書館学史、公共図書館史学史、Andrew Carnegie の図書館思想、それに図書選択論史に限定して概観する。

小倉親雄は、1960年代に発表した諸論文をまとめて『アメリカ図書館思想の研究』(1977)を刊行した。本書は Melvil Dewey の図書館思想の全体を深く解明すると共に、図書館学史ともなっている。Columbia大学における図書館学教育の思想と実践からときおこし、Williamson Report とも対比することによって、Dewey の図書館学をきわだたせている。

図書館学史という時、シカゴ学派を抜きにすることはできない。すでに藤野幸雄は Pierce Butler の「図書館学序説」、Shera の「図書館学の社会的基盤」を翻訳刊行している。河井弘志の“シカゴ学派の図書館学論”は、シカゴ大学大学院図書館学部 (GLS) 創立期の図書館学論を概観し、のちに Butler 図書館学にいたる過程を明らかにしている。

研究史の分野では、川崎良孝の“アメリカ図書館史学の史的考察”がある。これは、Shera, Ditzion, Harris, David Kaser, Robert V. Williams らの公共図書館史学史に依拠しつつ、研究史の全体をまとめたものである。特に、社会の変化、歴史学、教育史学、図書館史学の関連を系統的に論じた点は重要である。図書館史学については、第1世代の研究者(1850—1930)、Arnold Borden から Shera に至る第2世代の研究者(1930—1970)、Harris 以後の第3世代(1970—)と大きく時代区分した。そして、各時代の研究者がもつ図書館史記述の特徴を、川崎独自の観点から論じている。

それによると、第1世代は、Boston Public Library や New York Public Library の歴史の如く、個々の図書館の歴史を克明に記録するものと、公共図書館の全国的な発展過程を概観する通史的なものから成る。前者は年代記的で、図書館史の書かれた動機も anniversary-type のものが多い。通史を書いた Horace E. Scudder や Moses C. Tyler らは、公共図書館と公教育の関係を重視し、William I. Fletcher のように公共図書館の発展を支えた社会的背景に眼を向けた者もあったが、全体としては図書館の史実を年代順に忠実に記述する記述的図書館史の域を出るものではなかった。

続いて、シカゴ学派の Shera や intellectual history の流れをくむ Ditzion らによって代表される第2世代は、公共図書館を、本来、民主的な教育文化機関であると考え、自発的に組織される各種 social libraries の歴史を背景として、人道主義的、民主的運動によって公共図書館が成立したという、いわゆる democratic interpretation を確立した。公共図書館の発展過程は、アメリカの文化教育の民主的発展の一部をなすものと考えられたのである。

ところが、第3世代の代表者である Harris は、公共図書館の成立は、一部特権階級によるもので、労働運動などの社会不安を鎮静しようとする、social control, social stability を目的とするものであったという、いわゆる revisionist interpretation を提起した。この場合、Harris が特に強調したのは、Boston Public Library の設立を担った Edward Everett や George Ticknor の社会階層や社会思想であり、また移民の増大や犯罪の増加といった全般的な社会状況であった。この新し

い歴史解釈によって、図書館を取り巻く社会状況の、図書館史における重要性があらためて認識されたのである。

Andrew Carnegie の図書館思想研究においても、Harrisの影響ははっきりと読みとれる。川崎の“Andrew Carnegie の図書館思想”は、Carnegieの図書館への慈善を賛美するという従来の解釈に反論している。彼はまずCarnegieの図書館への慈善行為の概要を紹介したのち、Carnegieが提唱した他の慈善分野（公園、プール、研究所、教会のピアノなど）と、図書館への慈善との関連を追求した。さらに、図書館を含めたすべての慈善分野が、産業主義や、時代精神ともいうべき Social Darwinismと関連していることをしめした。確かに、図書館への慈善は知的機会を拡大するものであるが、そこには適者の選別と、不適者の切り捨てという側面が存在する。このように、社会的脈絡の中で図書館史を考える方向がいろいろ明確になりつつあるが、これにHarrisなどの第3世代の影響があることはいうまでもない。

河井弘志は長年の研究にもとづき、“19世紀の公共図書館図書選択論”を発表した。Carl B. Roden, Helen Haines, Leon Carnovsky, James Wellard, G. Evans, Esther Carrier らの業績をつぶさに検討し、19世紀後半の図書選択論史を描いてみせた。特に、第1章“図書選択論史の方法”は、各研究者が用いた方法を批判的に検討し、問題の所在と河井自身の方法論を展開した点で評価されるべきである。

その他、椎名六郎はElmer D. Johnsonの『コミュニケーション』を、小野泰博は『西欧の図書館史』を、更に長沢雅男はSamuel Rothsteinの『レファレンス・サービスの発達』、古賀節子はHarriet G. Longの『アメリカを生きた子どもたち』をそれぞれ翻訳刊行し、アメリカにおける図書館史の業績を共有する上で寄与するところ大であった。（完）

注) “日本における図書館史研究の現状と課題”は、IFLA大会での発表原稿であるが、本会のニュースレターに載せたのは、最初の段階でもちよった原稿である。社会的なアプローチを求められたことから、日本図書館史研究とドイツ図書館史研究の最終原稿は、ニュースレターに掲載したものと大幅にことなっている。アメリカについては、一応、検討を経た最終原稿に掲載した。また、最終原稿の構成は、「第1節 はじめに」「第2節 日本図書館史研究」、「第3節 アメリカ図書館史研究」、「第4節 ドイツ図書館史研究」、「第5節 まとめと展望」という構成になっている。

*事務局からのお知らせ
新入会員

*『図書館史研究』第三号が刊行されます。内容は次のようになっています。

- 永末十四雄 日本における地方図書館史研究の動向と課題
 加藤 三郎 昭和前期における愛知県の図書館活動
 坂本 龍三 札幌区(市)教育会付属札幌図書館
 関野 真吉 (遺稿) 京城帝国大学図書館
 藤野 幸雄 図書館史教科書の改訂(続)
 石井 敦 日本地方公共図書館史文献目録
 阪田 蓉子 図書館史研究会の活動経過

*7月に発行されます

*値段は1200円。是非、お買いもとめください。

* 第17回運営委員会は、6月20日(金)新宿の滝沢(午後6時30分~9時)で開催した。出席は石井敦, 是枝英子, 油井澄子, 寺田光孝, 阪田蓉子, 川崎良孝。「図書館史研究」第三号は最終段階にあり7月中に刊行できる予定。本年度のセミナーについては研究委員会案を最終的に承認。さらに、雑誌の長期展望を中心に話し合った。次回の運営委員会は9月14日(日)セミナー当日に開催する。

